
ナルト、生きてます

こんたそば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナルト、生きてます

【Nコード】

N6121Z

【作者名】

こんたそば

【あらすじ】

とある女神さまが統括する『NARUTO』の世界。
オリキャラが介入したことによって、魔改造されたナルトが己の身を守りながら、大切な人を見つけて共になるまでを書く物語。

000：死神、規格外の魂に憂鬱になる

幾千、幾万の魂を狩り、その狩り取った魂を適当な神に売り飛ばしながら、自由気儘で自堕落的な日々を過ごしていたとあるある日、そんな俺のところに、死人のように顔色を青白くした下級神がやってきた。面倒くて、厄介そうだなと心の中で愚痴ながらもその下級神の話聞くことになった。

どうやらこの下級神、俺から買い取った魂を自分が統括する世界に送り込み、四苦八苦する様子を仲間内で見せあい嘲笑ってきたらしい。心の中でこの下級神さまは暇人なのだなあ…と、いつもせつせと働いているジジイの後姿が頭の中に浮かんで消えた。

下級神は俺から買い取った魂に、『今から行く世界にて私が出したノルマを達成できれば元の世界に戻してやろう』と嘘をついたようだ。そして、その魂が与えられたノルマを達成しそうになったのを見て、この下級神は何を思ったか、その魂に『異世界の能力はいらないか』と話を持ちかけ、半ば無理矢理に能力を押し付けた。そして、新たなノルマを与えた。

この時点で、その魂は『異世界の能力ひとつにつきノルマひとつ』という構図を見出したようだ。その証拠に、その魂は他に4つの異世界の能力を望んだ。この嬉しい誤算に喜んだ下級神は何も考えずに4つのノルマを与えて、椅子に踏ん反り返った。これでまた愉しめると思うたのだろう。

この時点で気付いていれば、まだどうにかなったかもしれないのに。それまではその世界観に合わせて自重していた魂だったが、浅はか

な下級神の力によって手に入れた能力をフルに使って、原作ブレイクは当たり前、自分の前に立ちはだかる壁という壁を全て破壊していく。これに焦った下級神はノルマを追加しようと画策するが、能力はもういらないと突き放されてしまい結局、あつというまに与えられたノルマを6つともクリアしてしまった。

その魂は当然の権利を主張する。

「ノルマを全て達成したのだから、元の世界に戻せ。まさか神のくせに約束を破るとか言うんじゃないだろうな！」

と、下級神に対して強気な姿勢を取っているようだ。

話の概要を聞いた俺の前には、胡麻を擂るように手を合わせて俺を見ている下級神がいた。その眼は何故か期待に満ちている。

つまり、こいつは自分の尻拭いを俺にさせて無かった事にしようとしているって訳か。はあ：反吐が出るぜ。

俺はゆっくりと立ち上がって、壁にかけてあった愛用の大鎌を手にとる。

「人間界にもルールがあるように、神界にもルールがあるってこと教えてやるよ」

俺は振り向き様に下級神の身体を真一文字に切り裂き、その魂を狩り取った。そして、懷から取り出した魂のランタンの中に貯蔵する。このまま、一般の魂と一緒に輪廻転生の環に入れてやろうと思ったが、こいつと同じようなことをしていそうな神など沢山いるだろうと思い、時期を見て売り飛ばそうと決めた。

で、狩り取った下級神が統括する世界を見に来たら、いたよ。俺の範疇を超えた規格外の魂が。当然の如く、俺の所有するランタンには収まりきれないほどのエネルギーを内包している。

俺は一度、ジジイの下へ向かい特注品のランタンを借りた。

その際、「がんばっているか？」と尋ねられたので適当に「ぼちぼちだ」と返しておいた。

特注品のランタンに規格外の魂をなんとか入れることに成功した俺は、この魂の履歴書を作成した。

『名前は千手カンノン。出身世界は『NARUTO』。能力は、念（強化系）【H×H】、霸王色の覇気【ワンピース】、羅漢パワー【ネギま】、瞬間回復【マジ恋】、そして異能生存体【ボトムス】。（正直最後の奴がなければ、この魂も俺の死神の大鎌で狩り取れたはずなんだよな）外見は長髪で筋肉質の大男。下級神に与えられた最後のノルマである「主人公であるナルトの救済」は封印から解放された九尾を九割殺しにして沈静化した後、己の身体に封印させ、面の男は七日七晩追いまわして戦い細胞レベルまで粉碎したことによって完遂』

こんな規格外の魂を俺にどうしろっていうんだよ。（泣）

俺はこの魂の履歴書を持って、あらゆる世界を統括する神々の下を巡った。こんなのを輪廻転生の環にいれたらとんでもないことが起きてしまうので、どこかの世界で魂を沈静化させないといけない。もしくは何処かの世界で死なせて放置するかだ。まあ、それが出来たら最初からこんな風になっていないんだけどな。

結局、色々な神々の下に行っただけで色よい答えはもらえなかった。さすがに自分の思い通りになっている世界にこんな規格外な魂を受け入れるわけが無いか。

途方に暮れていると、俺の前につくりと肩を落として歩く女神さまがいた。

確か彼女もまた『NARUTO』の世界を統括していたはず、と思った俺はその女神さまに話しかけた。

「どうかしたんですか？」

「はぁ……。いえ、私とある世界を統括しているんですけど、毎回息子が敵に廻って父親や母親、双子の兄妹と戦うことになって、最後には真実を知ってコワレルっていう結末になるんです。それを見ているのがもう辛くって……。ぐすっ」

ポロポロと涙を零す女神さまを見ながら俺は首を傾げた。

「念のために確認しますが、何故都合のいいように介入しないんですか？」

「……介入ですか？ 出来るんですか？」

女神さまに質問を質問で返されることになるとは、やべえ、頭が痛くなってきた。

「自分が統括する世界には神はランクに関係なく介入が可能なはずです。こんなこと俺（死神）に尋ね返さないでください」

「……でも、私その世界に介入できたことないですよ。だって私、裏ルートで元々もっていた世界と私が好きな世界と交換してもらったんですもの」

って、おいしいおいしいおいしい！！それ禁忌の中でも最高級にヤバイ禁忌じゃねえかあああ！？そんなにこにことした笑顔を浮かべて微笑むんじゃないよ。完全に騙されているよ、女神さま（アంత）。

「……交換した相手は誰です？」

「えっと、上級神の○○さまですよ」

さらりと言いやがった。これは審問官に報告だな。一斉取締りもあるな。しばらく小遣い稼ぎは控えておくかな。

「で、介入する方法があるんですよ。教えてくださいますか？私、あの親子が4人揃って、きやつきやつでうふふをするような世界を見たいんです」

目をキラキラと輝かせて俺を見つめてくる女神さま。はあ。俺って人を見る目ないな。まさか、こんなにも清楚そうな女神さまがとんだ腐女子だったとは。声を掛けたのは失敗だったかもしれない。もう、メンドクセー。こうなったら言い包めて、無理矢理にでもこの規格外の魂を押し付けてやる。

「ふっ、簡単ですよ。同じ世界観で育った魂ならば、世界を移動させた場合、その世界に最初からいたことになるんです。確かにその兄妹と同じ年代の魂ならばそんなに影響力はないですが、俺が偶々、

偶然、幸運なことに持っている魂は、女神さまが欲しくてたまらない人材であることは間違いありません」

「おお♪」

「普段であれば、『スッ』（電卓を取り出し）、『カタカタ』（電卓で適当な数字を出す）、『バツ!』（女神さまに見せ付ける）、この位の値段になるのですが、ここは女神さまの世界を救いたいという純粋な気持ちと女神さまの美貌にまけて、『カタカタ』（電卓で適当な数字を打ち）、『バツ』（最後にクリアを押して『0』を出して見せる）、タダにしておきましょう」

「ありがとうございます。このご恩は一生忘れません。えへへ、やったあ♪」

ニヤリ。

「どんな世界でも狩り取った魂であればいれることができますからね。では、このランタンをお持ち下さい。そして、この魂を貴女が統括する世界にいれてこう囁くのです。『主人公とその家族を救うのが貴方に与えられる最後のノルマです』とね」

「ノルマですか?…まあ、あの家族を救ってくれるのなら、文句はないんですが…。本当に大丈夫ですか?」

「疑うのなら他の神さまの「すみません。ごめんなさい。申し訳ありません。冗談です。冗談なのです。お願い、見捨てないでー!!」

泣きながら『がばっ』と抱きついてきた女神さまを、なんと引き剥がそうとするが中々剥がす事が出来ずに奮闘していると野次馬が集

まってきた。

「ちよっ!？ 疑われる!？ 俺が別の意味で疑われる発言はよしてー!
!? ち、違う、俺はこの人とはそんな関係じゃない!! って、ジジ
イ!？ なんでこんな所にいやが……は? 『立派な嫁を見つけたな。
これでワシの跡継ぎも安泰じゃな』? って、ふざけるのもいい加減
にしやがれええええええええ! って、女神さまも抱きつきながら
『ぽっ』って頬を染めるんじやねえええええええええ!」

001..ナルト、木の葉の里に到着する

守衛が里に入るための門を開けると荷物を背負った13歳から15歳くらいに見える少年が門を見上げながら立っていた。

少年の髪はあちこちに跳ねている金色の癖毛、門を見上げているのは青い瞳。顔は少年から大人へと変わる途中といったおもむき。少年の頬には獣の髭のような痣がある。

その少年は守衛がいることに気付くと頭を下げて、「ごくろうさまですってばよ」と明るい声で話し掛けてきた。

守衛は里を歩くのにはまだ時間が早すぎると門の横に設けられている守衛室に招いた。少年は背負っていた荷物を置いて椅子に腰掛けた。そして、羽織っていた外套を畳み、荷物の中に入れ込む。

「……うーん。どこかで会ったかな？ 凄く、どこかで見たような顔なんだよな」

「えー。俺の顔は、そこまで有名な顔じゃないってばよ。有名だったのは、俺のじっちゃん。いろんな国のビンゴブックに載っていたってばよ」

「どんな危険人物だったんだい、その人!？」

「ん、千手カンノンっていう名前だったんだけど、守衛のおっちゃん知らない?」

「千手…カンノン? ……ああ、『木の葉の生けるバグキャラ』か」

千手カンノン。

木の葉の里に住む人間にとっては守護神であり、疫病神でもあった2代目火影・千手柱間の息子。長身で髪を膝の辺りまで伸ばした筋肉質の大男。二の腕が女性の腰周りに匹敵するとかしないとかわわっている。異名としては先ほど言った『木の葉の生けるバグキヤラ』や他にも『死なない男』『不死身バカ』『つかあのおっさん手裏剣やクナイが刺さんねー上に、術くらってもピンピンしているんですけど!?!』などがある。

「ってことは君にもその血が？」

守衛は金髪の少年から距離をおいた。それを見ていた少年は苦笑いしながら守衛にこう告げる。

「残念だけど、じっちゃん俺の育ての親であって、血の繋がりはないんだってばよ。ま、忍の師匠として色々学んだけど」

「君も忍者なのかい？それにしても額宛がないけど…」

「俺はまだどこにも所属していないんだってばよ。何せ、俺は捨て子だったんだってば。それで俺を拾って育ててくれたじっちゃんが各国に連れてってくれて、親探しをしてくれていたんだってばよ。でも、そのじっちゃんも去年病気で死んじゃって…」

金髪の少年は顔を俯かせて、その青い瞳からポロポロと涙を零した。守衛は慌てて、愛妻に準備してもらった仕事鞆の中から手拭いを取り出して、少年の前に差し出した。

「おじさんがいらなことを聞いてしまったな。すまん」

そう言って頭を下げた。

「ううん、いいってばよ。今はこうやって、じっちゃんが残してくれた遺産と遺言書に書かれたとおりに世界を廻っていたんだってばよ。けど、遺言書には絶対に木の葉の里には近付いてはならないって書かれていたんだってばよ。なんで？」

「あー。君は忍になるんだよね。うん、悪いことは言わない。ここ（木の葉の里）はやめておいたほうがいい」

「じっちゃんの遺言書にも詳しい理由が書かれていなかったんだってば、ここには何があるんだってばよ？」

「……忍者の、いや木の葉の里全体の男女比率がな。……1…100だって言えば納得してくれるかな？」

「……??? 女の子がいっぱいではうはじゃねえの？」

「そうだね。けど、それは傍から見るとそうであって、渦中の人だとそうは言っていられないよ。こういう私もその1人だ」

「おっちゃんも忍者だったのか（キラキラ）」

「いや、私は普通の一般人だ。それでも幼馴染や友達、先輩後輩、近所付き合いで会う同年代の住民の9割が女性なんだ。今の妻と結婚するのも大変だった。指輪を買うために宝石店に入り、購入した直後から命を狙われるなんて……ガクガクブルブル」

「お、おっちゃん？」

「一人暮らしをしていた私の部屋に日ごとに違う女性がいるのは当たり前前、寝ているところを襲われる事もしばしば、結婚式には変身忍術をして妻に化けたくの一がいて、その策略に気付いた妻が包丁を振り回して、血みどろの……今となってはいい思い出。ハハハハハ、はぁ……」

守衛の背中が一回り小さくなったことに少年は気付いて彼の背中を摩る。

守衛のおじさんと金髪の少年の心温まるエピソードひとつがここにあった……。

「と、とりあえず。俺は親探しの依頼を出してみるってば。じっちゃんによれば、俺と同じ顔立ちをした男を捜してくれって言えばそれで大丈夫だってことらしいけど」

「そ、そうか。もし、両親がここで見つかったら何とか理由を見つけて、此処から去るんだぞ。家族と会うのは生きていれば何度でも会えるのだから、永住なんて考えたら駄目だ。かの有名な4代目火影が『赤い血潮のハバネロ』といわれたあの方と結婚すると言った時なんか、木の葉の里の至る所で暴動が巻き起こって大変だったんだ。……よく考えてみれば、実力のある男の忍者が結婚する時は決まって暴動が起きていたな……ははは（遠い眼）」

「マジで、ははは……。これなら我愛羅の所にいた方がマシだったかってばよ。でも、あいつも俺が他の女の子の子といるとキレていたし。かといって他の里は……って、よく考えてみれば、会う人会う人皆女だったってばよ!？」

「な、なんと！？他の里も似た状況だというのか！？最近は総じて男の子が生まれにくいとは聞いていたが、本当のことだったのか」

「ごめん、おっちゃん。俺、この里で家族が見つからなかったら、どこかの山奥で隠居するよ」

「ああ、その方がいい。私も今のところ子供はいないが、女の子が生まれてくることを願うよ」

「じゃ、こんど会う時まで元気でな、おっちゃん」

「ああ。つと、そうだ少年。君の名前は？」

「俺は。俺の名前は『ナルト』だってばよ」

002..ナルト、覆面銀髪忍者と鬼ごっこする

「はあ…」

俺の名前は『はたけカカシ』という木の葉の里の上忍で暗部に所属している。

そんな俺がこうやって一人で甘味処の団子を食べているのには訳がある。

（回想）

とある日、任務を終えて報告に行った俺を待っていたのは満面の笑みを浮かべた先生の姿だった。先生がああいう表情をしている時は必ず俺にとって嫌なことが起こる。そんな気がしてそのまま退室しようとしたが、飛雷神の術を使ってまで必死になって引き止める先生の姿に俺は涙した。

「カカシくん。これは君にしか頼めない重要な任務だ。この子たちの担当になってくれ」

「いやです。SSランクの任務の方がいいです」

「カカシくん、こういってはなんだけど……これも立派なSSランクの任務だ！」

「格好つけて言うことじゃありません!!」

「これを断るといっているのであれば、中忍試験の担当責任者にするよ。各国の上忍たちとくんずほぐれずの会談を行うといいさ」

「くっ、卑怯ですよ先生。これは立派な職権乱用です」

「ん。そこまで言うなら分かった。それじゃあ、カカシくんがこれから受ける任務は全て、ガイくんと合同任「分かりました。担当上忍になりますから、彼女との合同任務は勘弁してください」務に。あんなに愛されているのに、罪な男だよね。カカシくんも」

「一回、代わって差し上げましょうか、先生？彼女、敵の攻撃が一撃当てるたびに脱ぐんですよ。『くっ、攻撃に当たってしまったか。仕方が無い、速度を上げるために脱ぐか』って、脱いだら速度が上がるってどこの痴女ですか!!」

「ん。僕にキレないでくれないかい」

「先生はいいですよ。妻帯者で、木の葉のトップで、部下を顎で使える立場だから、現場の男性忍者にそのしわ寄せがくる。ハヤテなんか最近、過剰な女性忍者のスキンシップによる鼻血と吐血で貧血気味らしいですよ。イビキにも周囲の人間から俺は狙われている気がするって相談されたし。アカデミーなんかでは特に顕著でしょう、俺が担当することになるこの『うちはサスケ』なんてその筋からは『対人恐怖症』になっていると聞きましたか？」

「それは違うよ、カカシくん。サスケくんは、『対人恐怖症』じゃなくて、『女性恐怖症』なんだ」

「悪化しているじゃないですかああああああ!!!!」

（回想終了）

憂鬱だ。思い返すだけで、憂鬱になる。

ガイに関しては去年から担当上忍になったため、日常的に会うことが減ったため問題なかったが担当上忍になることを承諾してしまった今現在、非常に拙い。『先輩として、私が手取り足取り教えてやろう』といってきかねない。

「いっそのこと、誰かと」「」「「……！？（ギランツ）」「」「酒を飲みに行くか」

「」「」「「チッ」」「」「」

凄い圧力のプレッシャーに負けて言葉を濁してしまったが、俺のこの状況を打開するためには誰かと結婚するほか無い。三代目さまの息子であるアスマは紅さんに惚れている様だが、そんなことは周囲の女性は周知の事実。それを阻止すべく、日々様々なアプローチと過剰なスキンシップ、そして情報操作によって彼と彼女の仲は今や風前の灯。

好いた関係同士で一緒になるためには、忍者もビックリな情報隠蔽で結婚まで気付かれること無く一気に行くか、先生とクシナさんのように武力で全てを叩きのめした上で結婚するかのどちらかだ。

「はあ……。考えれば考えるほど憂鬱になる。ここは気分転換にさっき貰った資料を確認するでしょう」

俺はそう思ってホルダーから資料を取り出そうと右手を回したところ

ろで気付いた。大通りをトコトコと歩く1人の少年の姿に俺は先ほどもで会っていた先生の姿が脳裏に浮かんだのだ。あちこちに跳ねた金髪、地図を見るその瞳は青空のように澄んだ蒼。頬には獣のような髭があるものの、その姿は本当に先生を幼くした感じである。

「ちょっと、君！」

俺は咄嗟に立ち上がって声を掛けた。少年はその蒼い瞳で俺を捕らえて、逃げ出した。ちよっ、俺が何かしたのか？と首を傾げようとした瞬間、背後から誰かが近付いてくる気配を感じた。

俺は瞬身の術を使ってその場から離れた。

俺が座っていた場所に現れたのは、素早い身のこなしと卓越した体術に定評がある俺の幼馴染。

名前は『マイト・ガイ』。

男らしい名前とは裏腹に、外見だけみれば正に女！な女性である。出るところは出ていて、引っ込んでいる所は引っ込んでいるモデルもびっくりのスタイル。だが、性格というか性癖がいただけでない。脱げば脱ぐだけ攻撃や移動速度があがる生粋の変態だ。

「フッフ、避けたわね。さすが、私の生涯の好敵手！やっぱり、貴方の速さについていくには額宛だけの姿にならないと……って、何で逃げる！？」

逃げるに決まっているだろ……と、面と向かっては言わない。相手にすればただ奴の生着替えに付き合わないといけなくなる。俺は瞬身の術を多用して、先ほどの金髪の少年を追った。俺が追っか

けてくることに気付いた少年は、大通りから消えて屋根の上を最低限の動きでするすると素早く走っていく。

「凄いな。こっちも本気でいかないと……!?!」

俺が気合を入れた瞬間、少年はこっちを確認してきて何かの印を組んだ。次の瞬間には10人くらいの少年が現れ、四方八方に散っていく。

「これは分身?…いや、多重影分身の術か。おもしろい」

俺は腰に付けていたポーチから巻物を取り出し、親指の皮膚を歯で噛み血を出す。取り出した巻物を開いて、その書かれている場所に血の滴る親指を押し付ける。

《口寄せの術》

ボンッと煙と共に現れるのは俺が契約する忍犬たち。俺はまだ視界に映っている金髪の少年を指差して追うように言った。

「あの少年を追ってくれ、本体が分かったら俺に連絡してくれ。俺も追う」

そうやって俺は忍犬たちからの返事も聞かぬまま走り出そうとして

「アンタは男なのかってばよ?」

と、家と家の間に隠れていた金髪の少年に声をかけられた。

「へっ?なんでこんな所に?」

「俺はただ依頼をしに來ただけなのに、女という女に声を掛けられて変な所に連れて行かれそうになったから、さっきもそんな感じなのだろうって勝手に思ったんだってばよ」

「……大變だったんだな。里の者として、謝罪しておくよ。普段であればそういうことをするような人たちじゃないんだ。そうそう、俺の名前は『はたけカカシ』だよ」

「分かっているってばよ。どこの里でも男性忍者は皆優しいってば。俺の名前は『ナルト』だってばよ」

少年の言葉に俺は不覺にもうるっときてしまった。俺は金髪の少年に近付き頭を撫でる。

「はぁ、世知辛い世の中になったよな」

「まったくだってばよ」

俺は金髪の少年を連れて、先生の所に向かう。

俺の口利きで依頼を頼めば、依頼料は幾分か下がるし、数少ない同士は大切にしないと。

そうだ、ハヤテやイビキにも会わせてやろう。

この少年の依頼だって、俺たちが手伝えば早く終わるだろうし、依頼が完了するまで泊まる所だって必要だろうからな。

今日は先生の所為で嫌なことがあったけど、それでこの少年と会え

たというのなら得だったかな。

そんなことを思いながら、俺は木の葉の里にとって爆弾となる少年『ナルト』を4代目火影・波風ミナトの元に連れて行くのだった。

ナルト、死す？

今日は、十月十日。

他の人にとっては何の事の無い日かもしれないが、僕たちにとっては、とても大切な日だ。

娘を抱いたでもあり、息子を失った日でもあるから。

僕は書類整理をしながら13年前のことを思い出していた。

第十三次木の葉の女大戦を経て結婚した僕とクシナの間に子供が出来たと聞いたときは素直に喜んだ。それと同時に失うかもしれないという恐怖に見舞われた。

僕の妻であるクシナは九尾の人柱力であり、尾獣の封印が最も緩むのが出産の時だった。今まで成功例がなかったわけではないが、一歩間違えれば母子ともに死んでしまう可能性もあった。

だから僕は最悪の事態に備えて様々な準備を行った。クシナの故郷である渦の国にも行って、封印術を学んだ。新術を開発したりして備えた。自分達が新しい家族と共に明るい明日を生きるために。

そして、その日を迎えた。

クシナの出産時、緩んだ封印から九尾の赤いチャクラが漏れ出した。僕は渦の国で学んだ封印術を展開させようと構えた。その気付き

たのかは分からないが、赤いチャクラが狐の姿を模り僕を睨みつけるように浮かんでいた。互いに隙を見せないように、慎重になっているときにそれは聞こえてきた。

「おぎゃー！おぎゃー！」っていう新たな命の産声が。

僕はその産声を聞いた瞬間、気を抜いてしまったのだろう。でなければ、あんなことは絶対にさせなかった。

狐を模っていた九尾の赤いチャクラが生まれたばかりの僕たちの子供の中に入るのを見逃すことなど。

九尾の赤いチャクラが僕たちの子供を核にして、身体を具現化させていく。

「ナルトっ…！ナルト…！」

苦しい思いをして産んだ子供を奪われたクシナが悲痛な嘆きの声を上げる。

そんな彼女の必死な声をも無視して、それは僕たちの前に降り立った。

言うなれば、僕たちの子供の命を代償にして封印から解放された九尾だろうか。体躯は子狐くらいだが、周囲の地形を容易く破壊するほどの凶悪なチャクラを身に纏っている。後頭部からは耳のような突起が伸び、顎は獣のように大きく開くようになっている。

クシナは九尾のチャクラに当てられて気を失ったようだ。出産の直後ということもある。仕方が無い。

だけど、僕はどうすればいいんだ。目の前にいるコイツをどうすればいいんだ。

《殺せまい。ワシを殺せば、餓鬼も死ぬぞおおお》

そう九尾が僕に言ってきた気がする。でも、ここでコイツをどうにかしなければ里に被害が出るかもしれない。

父親として、火影として、決断が迫られている。僕は咄嗟に目を逸らしてしまった。

そして、現実から目を逸らすなど、九尾を見据えた瞬間、黒い球体が作られているのに気付いた。いや、気付いた時にはそれが僕に向かって放たれた後だった。

「クシナ…、ごめん。僕にはやっぱり出来ないよ」

僕は迫り来る衝撃に備えて目を閉じた。だが、何時まで経っても衝撃というか痛みというものがこない。恐る恐る目を開けると、

「ふん。こんなものかのう。これならば、雷影の一本貫手の方が痛かったわい」

黒い球体の何かを“握りつぶす”長髪で筋肉質の大男がいた。

「……もしかして、カンノンさまですか？」

「ん？波風の坊主か。大きくなったのう。ほほう、主が4代目か。カカカ、これはさぞかし楽しい宴が繰り広げられたのじゃろうな。」

……ええい、話しておる途中じゃ」

九尾の腕が伸びてカンノンさまに迫ってきたが、彼はその腕を左手で握り逆に九尾を自分のようにひきつけて、豪腕と呼べる右腕を大きく引いて九尾に向かって重い一撃を放った。その衝撃で弾け跳ぶ赤い九尾のチャクラ、ぐったりと横たわる赤子……って、らめええええええええ！？

「カンノンさま！もう少し、威力を抑えて下さい！あれの核になっているのは僕とクシナの子供なんです！！」

「いや、威力を抑えられる相手ではないぞ。とっている間に回復したようじゃな、先ほどまでは尾は4本じゃったが今は6本。諦めろ、波風の坊主。あれだけの禍々しいチャクラに包まれておるのだ、お主ならまだしも赤子では耐え切れんで死んでおるじゃろう」

「っ！？」

「木の葉の里のトップとして、非情になれ。奴に止めを差すのはワシが請け負ってやるから」

そういったカンノンさまは、腰を落として右腕を引いた。

僕は唇を噛み締めてそれを見届ける。

「…ごめん、ごめんね。護ってあげられなくて、ごめんね。ナルト」

「ラカンノン適当に右パンチ！！」

——キュボツ

「もう少し格好いい名前がよかったっ!!」

自分の子供の最期の光景がこんな名前の技と一緒になんていやだあああ!!

そんな僕の思いとは裏腹に迫り来る光の濁流にあがなうことも出来ずに飲み込まれる九尾。光が収まった後、僕が見たものは彼が放った光の濁流の先にあった山々が消し飛び、地形があらさまに変わってしまったっている所だった。

「ふむ、それではな。波風の坊主」

そう言って走り去るカンノンさまの背中を見届けた僕はその場に座り込んで、涙を、嗚咽を洩らす。

そんな僕の肩に手が置かれる。顔を上げると涙を流して、目元を真っ赤にしたクシナが立っていた。僕は咄嗟に謝ろうと口を開くが、クシナは『しい』と唇の前で指を一本立てて静かにするように促してきた。僕が首を傾げると、彼女は腰を落とし、その腕に抱く小さな生命を僕に見せてくれた。

「ナルトは…双子のお兄ちゃんだったんだってばね。妹を九尾から護るために、ナルトは先に産まれて来たんだってば」

そういつてクシナは笑みを浮かべようと必死になっている。

僕は痛々しい姿を見せる妻と、その妻の腕の中ですよすやと眠る娘を抱きしめて静かに涙を流したのだった。

ーコン。

扉が叩く音が聞こえて僕は顔を上げた。「入れ」と告げると先日、下忍担当の件で話したカカシくんが入ってきた。

「どうも」

「どうしたんだい？担当の件は変えられないよ」

「そっちも考えて欲しかったんですが、今はいいです。先生、依頼人が俺の知り合いだった場合って、依頼料がいくらか減額されたりしますか？」

「まあ、そのくらいはね」

カカシくんは『ほっ』と胸を撫で下ろしたようだ。

「どんな依頼なんだい？」

「人探しです。俺とハヤテとイビキの3人で当たらせてもらいますね」

「わかったよ。手続きは僕の方でしておくね。それで依頼人の名前は？」

「ナルトでくぺらっ!？」

カカシくんが言い終わらない内に僕の身体は動いていた。カカシくんの肩を掴み、身体を激しく揺さぶる。十二分に揺さぶって解放すると、カカシくんはふらふらと壁に凭れ掛かった。

「その依頼人の特徴は？年齢は？性別は？他に何か言っていないかったかい？」

「ううぷっ…。金髪、蒼い瞳、どっちかっというとかシナさん似の顔立ち、年齢は13歳から15歳くらい、男。育ての親はカンノンさまって言っていました」

「そこまで分かっていたら、その依頼人の探している人って僕だって分かるよね。何であんな言い方したのかな？」

「ささやかな復讐です」

「風遁・螺旋丸！」

「危なっ!？」

カカシくんが避けたおかげで執務室の壁に穴が空いてしまった。後で、土遁で埋めておかないとね♪

「避けないでくれるかな？」

「避けないと死にますっ!!！」

「で、その依頼人はどこにいるのかな？僕、次は外さないよ」

僕は懷からクナイを取り出す。

「いやいやいや、そこまでやりますか？」

「僕にとっては里よりも大事なことからね！」

「火影としてあるまじき発言!？」

カカシくんが迎撃の態勢を取ったのを見て、僕は動こうとした。だけれどその時、扉がノックもなしに開いた。

まず視界に入ったのはあちこちに跳ねている金髪の癖毛と艶やかな黒髪のツンツン頭。

そして執務室に入ってきた侵入者2人が胸の前で組む印は『虎の印』って火遁？

『火遁・豪火球の術』

『火遁・狐火の術』

執務室の扉に向かって放たれる炎。扉から入ろうとしていた人影は咄嗟の攻撃に避けることができずに真っ黒コゲに、ってちよつと!？

「大丈夫か、サスケ？」

「すまない、ナルト。本当に助かった」

「いってば。俺、同年代で同性の友達って、サスケが初めてなんだってばよ」

「それは本当か。実は俺もなんだ」

「サスケ！」

「ナルト！」

『『ガシッ！！』』

うん。男の子の友情っていいよね。

執務室の修理は大工に頼むとしようつと。さて、今のうちにクシナに連絡しておくか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6121z/>

ナルト、生きてます

2011年12月21日17時52分発行